半　集

故文學博士大西祝氏が「天地初發」を評して著者に寄せられたる手翰

目次

天地初發……一
黄泉門……一九
神子と魔王……二八
七雷……四七
大極殿……五一
官猿葬……五七
斥候兵……八七
筆力……一〇〇
君が代……一〇六
天長節……一〇九
秋田家……一一三

新婚旅……一一七
天然……一二三
松と藤……一二五
菊……一二九
聖誕祭……一三一
洪水……一三九
戀……一四四
愛犬……一四七
山墓……一五一
古英雄……一五七

半月集目次終

天地初發

一

靜なるものにもあるかな、
永遠の黒暗いとふかき
水の面。

水覆ふ黒暗ふきはらふ
靈風のうちにあやしき
聲すなり。

「人の子」よとよばれてひとり
おどろけばかさねてよびぬ、
「人の子よ」。

よぶは誰ぞ、神の使か、
羽衣の黄金の袖の
音もせず。

よぶは誰ぞ、神の子等か、
雲鳥の紅錦の裾の
影もなし

見あぐれば黒暗ふく風に
聲ありて三たびよびけり
「人の子よ」

二

聖靈

「きよからぬ肉の眼をもて、
おろかにも聖靈をみんと
思ふかや。

日の本の歌仙もいまだ
しら雲のうへなる天の

神あそび。

むかし我へブライ人に
きかせたる天地初發の
神樂歌。

汝がために天水地の
三の靈今やうたはん、
いざやきけ」。

三

天靈

「光あれよ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
いざやみよかし元始なき
常夜の黒暗も明そめて、
暗にわかるゝ光かな。
みよや光は晝となり、
くらきは夜となりにけり。
此新らしき光をば
善とみたまふエロヒムの
大御業こそかしこけれ。
夕となり朝となりけり、

第一日の日。

水霊

「荒巌岸のさかひなく、
底ひしられぬ水の中に
穹蒼あれ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
水の中なる穹蒼の
上と下とに水と水
立分れつゝ、久方の
天つみそらとなりにけり
空の海にも風たちて、
たゞよふ雲の波間より
みどりみえけり天の原。
此新らしき蒼穹を
善とみたまふエロヒムの
大御業こそかしこけれ。
夕となり朝となりけり、
第二日の日。

地霊

「水あつまりて大地を
あらはせかし」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。

天の下なる水はみな
ひとつ處にあつまりて
大洋とこそなりにけれ。
水の面にあらはれて
乾き初めくる地はみな
高峰とこそはなりにけれ。
「いまや野山に草の種
木の實なれ」よとエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
若草もゆる池のべに
花はいろ〳〵さき出ぬ、

青葉しげれる岡のべに
木の實さま〳〵なり初ぬ。
此新らしき海山を
善とみたまふエロヒムの
大御業こそかしこけれ。
夕となり、朝となりけり、
第三日の日。

天靈

「大空たかく光明ありて
地を照せ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ

色めづらしき青空の
みゆるかぎりは雲もなく、
いまさしのぼる日は初日、
月は新月晝と夜、
光と暗をわかちつゝ、
日は日を治め、月は夜を
まもるものとぞなりにける。
見よ、暑き日も寒き日も、
播種時も、収穫時も
かぞへて知れよ天つ星。
此新らしき光明をば

善とみたまふエロヒムの
大御業こそかしてけれ。
夕となり、朝となりけり、
第四日の日。

水靈

「水に魚すめ穹蒼に
鳥とべかし」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
波しづかなるわだつみの
海の深みに鯨うき、
岩きりとほし谷間ゆく

川の淺瀬に若鮎とぶ、
ひれふり遊ぶうろくづの
うかぬ淵こそなかりけれ。
たゞよふ雲に嵐ふき
高峰の岩に鷲さけび、
殘る日影に小雨ふり
麓の森に鳩のなく、
はね試むる百千鳥
鳴ぬ空こそなかりけれ。
此新らしき魚鳥を
善とみたまひ「とく生よ、

繁息よ、充滿よ」と殊更に
祝ひ給へるエロヒムの
大御業こそかしこけれ。
夕となり、朝となりけり
第五日の日。

地靈

「大地の面に昆虫もすめ、
獸もすめ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
深山の小鹿、峰の猿、
幽谷の荒熊、洞の獅子、

岡べの羊、野邊の牛、
小草がくれにはふ虫の
數もしられず、誰が爲に
これらを創造りたまひけん、
此美くしき大地の
主となるべきものやたれ。
神言きかんとかしこくも
御前にちかくつどひたつ、
神の子等をばみたまふて、
「いでやわれらに像りて、
人てふものを創造らなん、

そをば男と女とに
つくりて大地を治むべき
長となさん」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
人の糧なる木々の實の
味ひうまし鳥獸
食ふみどりの草多し。
「人も獸も皆生よ、
繁息よ、充滿よ」とエロヒムの
祝したまひぬ。見よ、人は
神の像につくられて、

野山の獸、空の鳥、
海のいろくづこと〳〵く
治むる君となれるかな
此新らしき天地の
萬物をいと善しと
よろこび給ふエロヒムの
大御業こそかしこけれ。
　夕となり、朝となりけり、
　　第六日の日。

四

天靈

エロヒムの
神榮高し、いや高し。
日も、月も、星も
創造たまひし空を見よ。

水靈

エロヒムの
神意深し、いや深し。
洲も、磯も、島も
創造たまひし海を見よ。

地靈

エロヒムの

神力廣し、いや廣し。
木も、草も、花も
創造たまひし山を見よ。

五

三靈

聖し、聖し、いや聖し。
高し、深し、いや廣し。
天地創造る御業より
やすませ給ふエロヒムの
祝しきよめし日にしあれば、
夕もなく、朝もなかりき、
第七日の日。

黄泉門

「やよや門守こゝろせよ。
何を得んとて美くしき
イスタル神や來るらん。

もしも「かへらぬ國の法
いなまば、黄泉の石の門
かたく鎖してこばむべし。

されどもしひて死の法を

まもるといはゞ、巌の戸を
あけて女神をいれよかし。」
アラトが宣示おもければ、
門守いそぎいで迎ひ
「イスタル神にいひけらく。
「いざ入りたまへ姫神よ。
七重の戸びらとくいりて
深きおもひをとげたまへ。」

第一の戸をひらきつゝ、
門守しひて御髪より
花の冠をぬぎとりぬ。

女神

「など冠をばぬぎとるぞ。」

門守

「こは死の神の宣示なり、
いざいりたまへ姫神よ。」
第二の戸をばひらきつゝ、
かれは女神の御耳より

眞珠の耳環ぬきとりぬ。

女神

「など耳環をばぬきとるぞ。」

門守

「こは死の神の宣示なり、
いざいりたまへ姫神よ。」

第三の戸をひらきつゝ、
かれは女神の御頸より
瑪瑙の頸輪ぬきとりぬ。

女神

「など頸輪をばぬきとるぞ」

門守

「こは死の神の宣示なり、
いざいりたまへ姫神よ。」

第四の戸をばひらきつゝ、
かれは女神の御胸より
玉の胸當ぬきとりぬ。

女神

「など胸當をぬぎとるぞ」

門守

「こは死の神の宣示なり、
いざいりたまへ姫神よ。」

第五の戸をばひらきつゝ、
かれは女神の御腰より
石の細帶ときさりぬ。

女神

「など細帶をときさるぞ。」

門守

「こは死の神の宣示なり、
いざいりたまへ姫神よ。」

第六の戸をひらきつゝ、
かれは女神の手足より
黄金の鏈ぬきとりぬ。

女神

「など鏈をばぬきとるぞ。」

門守

「こは死の神の宣示なり、
いざいりたまへ姫神よ。」

第七の戸をばひらきつゝ、
かれは女神の御體より

紅錦の御衣はぎとりぬ。

女神

「など衣をばはぎとるぞ。」

門守

「こは死の神の宣示なり、
いざいりたまへ姫神よ。」

「かへらぬ國」の風さむみ、
はだ衣もきぎる姿にて
常暗ながらはづかしゝ。

女神

「いからばいかれアラト神、
あはれ生命の水くみて
そゝがばいきん我男神。

アゝ我戀よ汝がために
我たづぬるは岩石もて
アラトがかくす眞清水よ。」

神子と魔王

一

ユダの荒野の夕月夜
椰子の木蔭の暗ければ、
底ひしられぬ死の海の
浪のひゞきぞかすかなる。

二

血汐したゝる草原に
山羊の片耳食殘し
巖の洞にやかへりけん、

さまよふ獅子の影みえず。

三

野鹿の骨をくはへゆく
怪しき鳥は通はねど、
棕櫚の葉ごしに月落て、
虚空にものゝ響しけり。

四

變化のわざか、惡靈か、
何かたゝずむ心地して、
身の毛もよだち骨うごき、
細聲きけばものすごし。

五

「我は暗世の主宰にて、
光をきらふ老蛇なり。
眞理をにくみ、道をすて、
生命をいとふ魔王なり。

六

我には見ゆる象なく、
火をはく口もあらざれば、
鋭き牙も利爪も、
角も翼もなかりけり。

七

雨よ、嵐よ、雷よ、
音をなたてぞ。電よ
火焰いだしぞ。雲よ汝は
いできて我をのせゆけよ。

八

ナザレの里の工匠なる
ヨセフがこゝろ惑はして、
マリヤを不義の妻とまで
おもはせしかど事成ず。

九

ダビデの村の孩子を

みなころせとてヘロデ王
おくる刀をあやうくも
遁去りしぞ口惜しき。

十

十二の歳の春祭
子をばかくして兩親の
こゝろをいたくいためしが、
殿の内にて見出しぬ。

十一

王も、祭司も、學者等も、
パリサイ人も、サドカイの

徒黨も皆我命に
そむかぬものとなりしかど。

十二

駱駝の毛衣、皮の帶、
髮の毛ながき豫言者の
「悔改めよ天國は
近し」とさけぶ荒野原

十三

蝮の裔といはれても
人のこゝろはヨルダンの
きよき流にをりたちて、

世の罪負へる小羊を
ヨハ子が洗ふおりしもあれ、

十四

あやしき事のありしをば
四十日經し今日も猶
わすれぬ民はいと多し。」

十五

さゝやく聲のやみぬれば
やがて惡魔を一村の
雲のせ行く空みれば、
夜深き星の影さむし。

十六

草木もねぶるころなるに
獨りねぶらず基督は
白き御袖におく露の
ふかき思ひに沈みつゝ、

十七

ながき四十夜野室をも
蝗も食で過しかば、
御顔もやせて、御目さへも
いとゞくぼませたまひけり。

十八

苔むす岩に夜もすがら
腰うちかけて居たまへば、
空より雲のくだり來て
試むる者いゝけらく

十九

「などかく饑て苦むぞ、
もしも爾が至高き
ものゝ子ならば、野の石を
パンとなしても食ひ得可し。」

二十

「パンのみにては活られず。

人の生命は只神の
言によると錄されし
聖誡あるをしらざるや。」

二十一

主の御こたへにおどろきし
惡魔やいづこ、しら雲の
猶たゞよへる空ならむ、
獨りさゝやく聲すなり。

二十二

「アヽあやまてり、あやまてり、
エデンの園の花の蔭、

小草が中に美しき
蛇となりてもありしとき、

二十三

色はうるはし、味はよし、
知慧の樹の菓に迷ひたる
婦の裔としらずして、
こゝろみしこそうたてけれ。

二十四

むかしモウセの屍を
我とはげしくあらそひし
ミカエルよりも猶まさる

今宵の敵をいかにせん。

二十五

我いふまゝにイスラエル
民をかぞへし王の子の
礎おきし殿なれば、
彼つれ行きて試みん。

二十六

聖き都の神殿みれば、
屋の棟高く一むらの
雲もかゝりて基督は
はやくもそこに立たまふ

二十七

「彼の子ならば己が身を
こゝより投よ、敷石に
ふれざるうちに使等の
來て支へんと錄されぬ。」

二十八

「神を試む可からずと
錄されたるをしらざるや。」
荒野にかへる基督の
うしろ姿をみをくりて、

二十九

雲にのる者いゝけらく
「彼が聖律をひきしかば、
我も詩篇の句もて
こゝろみたれどしたがはず。

三十

おもひぞいづるウツの邑、
家畜うばゝれ、家やかれ、
子等も僕もころされて、
身さへ病になやみしが、

三十一

妻の嘲、その友の

議論にもうちかちて、
我誘惑をのがれしは
一人なりしを思ひきや

三十二

ヨブより強き我敵の
此世の中にあらむとは。
いざレバノンの頂上に
彼つれゆきて試みん。」

三十三

熊もかよはぬ香柏の
林がくれをいかにして

のぼりましけん、基督の
たてる高峰に雲もみゆ。

三十四

東の野原みわたせば、
ニ子ベ、バビロン、ダマスコス、
西の海山みおろせば、
ロウマ、アデンス、ツロ、シドン、

三十五

近きサマリヤ、エルサレム、
猶エヂプトにあれのこる
都もみえて足下に

みねぬ國こそなかりけれ。

三十六

我を拜さば國といふ
國みな汝にわたへん」と
いゝし惡魔をかへりみて、
主は聲あらくのたまへり。

三十七

「サタン退け、唯主なる
神をば拜し、之にのみ
したがふべしと錄されし
聖訓あるをしらざるや。」

三十八

さらばこれよりゲッセマ子
髑髏が岡の十字架の
上にてまたんとく來よ」と
いふかと思へば雲消ねて、

三十九

夜もあけたれば、今はとて、
山路をくだる基督の
前に後にあらはれて、
天つ使はうたひけり。

四十

「救世の主よ萬歳よ、
ダビデの裔よ萬歳よ、
平和の君よ萬歳よ、
勝利の王よ萬歳よ。」

七　雷

一

獻げまつれよ神の前、
雲ゐの宮の神の子等。
神の御前にたてまつれ
猛き能力も尊榮も。
神の御前にたてまつれ
名にふさはしき榮光を。
拜みまつれよ神の前、
聖き祭服をとくつけて。

二

神の御聲は鳴りそめて、
雲の波たつ空の海、
夕だつ雨ともろともに
天降ります神をみよ。
神の御聲は天の原
ふみとゞろかす武力あり。
神の御聲は雲の峰
ふみゝづすべき稜威あり。
あなかしこしや雷も
エロヒム神の力かな。

三

神の御聲の鳴ごとに、
峰の香柏をりくだく、
レバノン山の香柏を
をりさきたまふ神をみよ。
雲にかくるゝ峰をさへ
小牛のごとくおどらせぬ、
シリオン山も年少き
野牛のごとくおどらせぬ。
あなかしこしや電も
神の御聲の光かな

四

神の御聲は猶鳴て
雲風あるゝ荒野原、
カデシの野をばあらしつゝ、
天翔ります神をみよ。
神の御聲におどろきて
はらめる鹿も子を落す。
雨にうたれて青葉さへ
枝よりきれて散にけり。
天つ宮居の神樂歌
うたふもたかき榮かな。

五

神の御座は夕立の
名殘の雲のいづてぞや。
神はかへりて永遠の
王の寳座につきたまふ、
神は能力をその民に
今こそくだしたまふなれ。
神は平安をその民に
今こそくだしたまふなれ。

大極殿

冷泉橋をたゞひとり
わたる疏水の風さむみ。
應天門を過行けば
石の御階におき初し
霜うつくしき碧瓦、
大極殿の右左、
蒼龍白虎も高樓の
丹ぬりの軒に朝日さし、
黄金の鷄尾はまばゆくも
晴たる空にかがやきぬ。
玉垣つくる神杉の

木の間にちらと村紅葉
なびくとみしは雲鳥の
綾の御衣のうごくなり。
松にかけたる羽衣の
袖てそみにね紅の
御袴ながし御姿は
天つ處女にことならず、
かほるもあやし白菊の
花の御顏は立田姫、
まことに秋の女神なり。

女神は我にいひけらく
「いざやきけかし我友よ、
櫻は一夜蓮は朝、
さかりみぢかき世ならずや。
柳に野分、竹に雪、
折られがちなる世ならずや。
野山に木々は多けれど、
楓にまさるものやある。
もし樹を植ば汝が庭に
かならず植よ若楓。
春の若葉もめづらしく、

夏は青葉の陰すゞし、
秋の紅葉の色深く、
冬は」といふて口ごもる。
「冬は」としひて問ひければ、
うちゑみながら「冬はまた
落葉かきよせたき火して、
木がらし寒さ冬の夜を
わすれよかし」とよりそひて、
御口をあはれ我頬に
つけなんとするをりしもあれ

平安宮の殿司
八ひら手たかくうつ音に
さめておもへば夢なりき。

百猿舞

一

お猿は目出たや目出たやな、
コレ〳〵見ざるや猿のすむ
峯の松原雲はれて、
初日の影は匂へども
まだ雪深し谷陰の
ねぐらの竹もをれふして、
片山里の梅の花
咲しいでねば春來ぬと、
そらねもなけぬ鶯を

古巣ながらに殘しおきて、
子猿はいだき親猿は
肩に背負ひし、風呂敷の
上にのせつゝ深山より
都に來るや猿舞、
申の歳とて常よりも
今年ははやく來りけり。

二

都は人の海なれば、
こゆる年波面白く
くるりとかへつて、たつたりな、

たつたら、ついでにひとつ舞へ。
お猿は目出たや、目出たやと
ひきつゆるべつ麻手綱、
ひくやあみ笠猿引の
腰の餌ふごをつるし柿、
かち栗、蜜柑いろ〳〵と
年の祝の木の實をば、
もらひためては又猿に
わけてやるこそあはれなれ。

三

ヤコレ、コレ〳〵猿舞の

歌のかけ聲にぎやかに、
花の袖なしよそほひて、
かく百猿のむかしより
舞ひしためしのあろかひな、
エコリヤ、コリヤ、ヤイコリヤ、
さりとは〱、ノツあろかいな、
さんなまたあろかいな。

四

花の都の猿舞
ちまためぐりて、商人の
家ものこらす舞ひつくし、ト

市の外まで舞ひいでぬ。
神社、佛閣、教會堂、
こゝも浮世かさま〴〵に
年の始をいはひ杉、
青葉かざれる禮拜堂、
松竹たてし法の門、
神代おぼゆる玉垣の
榊にかけしみしめ繩
ゆひあらためて世をきよめ
けがれを申の年はきぬ。
ヤコレ、コレ〱今年より

目出たき年のあろかいな
さんなまたあろかいな。

五

庚申塚の跡みれば、
見ざる聞ざる言はざるの
石も野川のかり橋と
いつかなされて、山賤が
草かりぎるをのせてゆく
馬にふまるゝ世なりとは
しるやしらずや、玉鉾の
路をまもりの猿田彦、

道祖神社の祭とて、
猨女の舞か、猿舞か、
黄なる扇を腰にさし、
鈴ふりならす袖青し。
沐猴にして冠すと
みざるもののなき黒烏帽子、
白ゆふかけし榊葉の
色もかはらぬ神やしろ、
御前にしける菅薦に
かしこみふして八ひら手の
ひゞきも高く大幣を

手向まつれるうしろより、
鏡にうつる影みれば、
里の氏子が供へたる
神の大御酒そなへざる、
さきに毒味やなしつらむ、
髭いかめしき宮司
くぼめる眼いろ赤し。

六

秋の芭蕉のやぶれ笠、
それさへ欲しき初時雨、
音にきこえし猿蓑集、

風に散りくる奥山の
紅葉かきわけ栗ひろふ
猿丸太夫、小男鹿に
けられてキャット鳴く聲を
きくぞかなしきやまとうた、
よまぬものなし百人首、
豐太閤記、清正傳、
猿蟹軍記、猿小說、
狙仙が筆のいのち毛の
さし畫は殊に面白き。
猿文學を見ても猶

すめら御國を言靈の
幸はふ國といはざるや。

七

神の古事記なるに
そのふみをさへまなばざる、
べからざるともおもはざる、
宮主は猿にまさるかや、
ヤコレ、コレ〱猿にさへ
しかざる人の國の道
說きしためしのあろかいな
エコリヤ、コリヤ、ヤイコリヤ、

さりとは〱、ノウあろかいな、
さんなまたあろかいな。

八

幾春秋をふる寺の
苔むす軒の破瓦、
かくすもあはれ夏木立、
猿も涼しく午眠する
青葉がくれに花咲きて
さかりひさしき百日紅、
冬枯そめし梢より
すべり落來る木の葉かな。

九

御堂に安置す弘法の
筆の誤、樹から猿
落葉みだるゝ木がらしに、
音さへわたる入相の
かねはあだなる世をすてゝ、
山に入にし法の師の
植ゑし蜜柑のいかなれば、
こがねいろにやいでぬらむ、
壁に向はぬ禪僧も
まだ色青き九年母

食ひつゝ猿のこしかけて、
日向にむきて墨染の
袖の縫目をかきわけて、
虱とる世となりにけり。

十

時雨をよきて木の葉猿
かげにかくれし山寺の
石の佛の御袖にも、
霜のむすびて寒ければ、
くみて手向る人もなき
あか井の水やこほるらむ。

氷くだきて世の垢を
洗はぬ岩の苔でろも、
頭巾、猿股、乳のみ子の
外には着ざる猿でんち、
棹にかけつゝはすやたれ。
日影戀しき冬ながら
障子とざして、方丈の
椽にもださず三猿の
法の綱にて括り猿、
いかにくゝるや猿轡
あはれ和尚がかくし妻、〳

見ざるものには言はざるも、
副寢する子の泣聲を
聞かざる人やなかるらむ。

十一

寶物展覧、大法會、
黄金佛の再建立、
またもちまはる奉加帳、
檀家めぐりて布施ばかり
鳥の骨燒、牛の肉、
魚のはらわた食ふみれば、
口を耳まであき皿に

生血ばかりぞのこりける。
意馬心猿の狂ひ酒
何か斧をはし月夜、
水鳥ねらふ猿澤の
池の舟底朽にけり。
法の舟人かの岸に
到らぬさきにしづむらむ、
水にうかべる月影の
月ならざるをしらざるや。

十二

西の空のみとぶ鷲の
高根の雪をふみわけて、
世のうき雲のかゝらざる
眞如の月をながめざる
べからざるともおもはざる、
僧侶は猿にまさるかや
ヤコレコレ〱猿にさへ
しかざる人の法の道
説きしためしのあろかいな、
エコリヤ、コリヤ、ヤイコリヤ
さりとは〱、ノウあろかいな、
さんなまたあろかいな。

十三

松にかゝれる藤蔓、
ねだよりつるにとびうつり、
手に手をつなぐ手長猿、
さがる谷間の水のおも、
つるよりねだにとびかへり、
手に手をとりて友猿の
のぼる高峯の雲のおく。
いづこも神の家なるに、
たゞ教會の内にのみ、
神はいますと思ひけり。

十四

この世彼世のつだてさへ、
あらざる神の國なるに
その會堂も來てみれば
世を白壁のよそにして、
ひとりたかくぞたちにける。
禮拜堂の花かざり
うばらも百合も一束に、
たばねてさすや束髮の
少女がひける風琴の
いつもかはらぬしらべかな。

いつもかはらぬ讃美歌を
きけばねふりて、此世より
いよ〳〵遠く鳴銅や、
響く鐃音たかく
机たゝきて聽く人の
夢おどろかす說敎者、
名のみきゝたる外國の
大說敎者の口まねに
手まねをそへてキャッ〳〵と
何をいふらむ、山猿に
あらざる人のなか〳〵に

きかせられてもわからねば、
天つ使の御言かと
思はぬものやなかるらむ。

十五

遠きむかしの豫言者も、
使徒も知らざるいまの世の
社會問題、禁酒論、
比較宗敎、進化論、
まさるはまさる、ふとれるは
ふとれるなりといひながら、
まされるものにしたがはず、

猶かとれるを嘲りて、
しろき歯をさへ剥出し、
わらふも猿の尻笑ひ、
朝三暮四の新神學、
高等批評も其種は
古き書より鳥の跡、
蟹のあとなる異國の
文の中よりぬすみ來し、
柿の蔕なる長談義、
きけばはてなし尾長猿、
をはりまできく人ぞなき。

十六

夜の祈禱の集會より、
かへればやがて高帽子、
古洋服をぬぎすてゝ
ころりと閨の小夜衣、
うちかつげどもねふられず。
むかふともしびかゝげつゝ、
針もつ妻に言ひけらく、
知るや吾妹子、人よりも
三筋たらざる猿の毛の
筆とるわざのはかなさを。

硯の海の藻しほぐさ
かきちらしたるかひもなく、
たまもあらざる說教の
草稿なりし鴻文章、
あはれ都の新聞の
紙折舟にのせられて、
文學海にうかべども、
こぎゆく棹の露ほども
報酬を得たることはなし。
机の島による浪の
音になたてぞ人しれず

實業海に入江舟、
底ふかゝらぬ猿智慧の
はたらき多き世ならずや。
あし分小舟さはりあらば
海月だましてのり行かん。

十七

都にゆかば駒の引く
車もあれど猿引の
背にうちのりて猿芝居、
まづみにゆかん白猿の
むかしゆかしき堀川の

名も與二郎が一段、
夢幻か、現實か、靭猿
能狂言もまたおかし。
春は花見て日をくらし、
秋は月見て夜をあかし、
夏は海邊に汐あみし、
冬は温泉にいでゆかん
庭のすぎ垣すき通る
猿頬の天井、杉の窓、
猿戸かゞやく家たてゝ、
都のうちにすむもよし。

またせ吾妹子、そのときは
蟹のむすびととりかへし
種も大木となる柿の
思ふがまゝになりぬべし。」

十八

夢物語きかせられ、
よろこぶ妻がおきてたく、
朝食の箸をひるとりて、
くらふ栗飯その嘸に
何の貯あらずとも、
かわける人に水一杯

あたふることのならざるや。
幹より枝をさきてとる
葡萄の汁と思ひしに、
何をのめばか顔の色の
あかくなるまで酔ぬらむ。
机のもとにねふりつゝ、
聖書まくらに高鼾、
主の誡命をまもらざる
べからざるともおもはざる、
牧師は猿にまさるかや。
ヤコレ、コレ〳〵猿にさへ

しかざる人の神の道
説きしためしのあろかいな、
エコリヤ、コリヤ、ヤイコリヤ、
さりとは〳〵、ノウあろかいな、
さんなまたあろかいな。

十九

お猿は目出たや、目出たやな、
たつ年涙ともろともに
くるりとかへつてたつたりな、
たつたらついでに目出たくも、
舞をさめずや百猿よ。

ヤコレ、コレ〳〵人はもと
猿ならざるや、いかにして
猿と人とをつくりけん、
神のみわざはしらねども、
今の世の中よくみれば
猿とも人ともわからざる、
ものゝみ住みぬ、むかしより
かゝるためしのあろかいな、
エコリヤ、コリヤ、ヤイコリヤ
さりとは〳〵、ノツあろかいな、
さんなまたあろかいな。

斥候兵

一

いなゝく聲やいとひけん、
駒にものらず終夜、
深雪のうちにたち劍
みもさえわたる斥候兵。

二

敵のねふるを松陰に、
月をばよきて谷でしに
峰の陣營をみわたせば、
旗吹く風の音さむし。

三

杉の枯枝かきあつめ、
槙のふし柴ふしながら、
たくやたき火の影白く、
降來る雪もみゆるかな。

四

ふりさけみれば大空の
月は雲間に照ながら、
谷にしら雪つもる夜は
木の下陰も暗からす。

五

山はさながら眞晝にて、
峰路さやかにみえければ、
夜明もまたず松の火も
ともさで敵やたちにけん。

六

みよや陣營のかゞり火も
いつしか消て山風に
なびきし旗の影もなく、
雪さへしばし降やみぬ。

七

血しほのながれ骨の山、

いくさの後の野にいでゝ
屍たづぬる狼の
通ひし外に路もなし。

八

夜深き雪に荒岩の
うづぼにこもる熊羆も、
木の根も、草も、埋れて
とりすがるべきものもなし。

九

からくもくだる岩岸の
雪折竹の末ふして、

さやかにみゆる谷川に
水のむ虎の聲すなり。

十

雪にのこれる草鞋の
あとさきみつゝ斥候兵、
劔を杖に山川の
氷の上をわたりゆく。

十一

夜や明ぬらん屍に
さわぐ鴉の聲さむし。
敵はいづこに雪の路、

大筒ひきし車の輪、

十二

駒のあしがき、靴の跡、
のこるもあやしあや杉の
あやしと思へば筒の音
耳もとちかくひゞきけり。

十三

旗、馬印、鐘、太鼓、
うちたゝきつゝ足引の
山もさくべき音ながら、
敵はわすかに五十の涙。

十四

「騒がば騒げ、さわぐとも、
やがてくだきて歸らなん。
先にかへりて此よしを
我中將につげよかし。

十五

歸れといへど斥候兵、
敵みていさむ武士の
こゝろの駒をとめかねて、
すゝまゝほしくみゐにけり。

十六

猶たつ兵をかへりみて、
「死ぬることのみ勇士の
名譽ならんやなかく＼に
敵にうしろはみするとも、

十七

自己にかちて歸るこそ、
斥候する身の義務なれ
歸れ」といへば今はとて
三人の兵ぞかへりゆく。

十八

のこる一兵はあだ涙の

よると間もなくながれ彈丸
うけてあなとも岩岸の
たちまちそこにたをれけり

十九

太刀風あらくたゞ一人
さかまくなかにきり入りて、
五十のあだ浪追かへし、
かしこにくだき、こゝにきる。

二十

ちかよりかねて木の間より、
岩の陰よりうちかくる

弾丸をば三たび身にうけて、
氷の刃くだけゝん。

二十一

たをれてやみし勇士の
屍を敵にみせじとや、
降かくすらん白雪の
いさぎよき名を殘しけり。

二十二

「いきて再び還らじ」と
いひしは日本武士の
つねの言葉の花とのみ

思ひしものをみよやみよ。

二十三

屍の上にふる雪の
うづみのこしゝ軍服、
黄金の鈕釦、白銀の
帶もかゞやく玉劍、

二十四

さすや朝日の影あかく
血しはながれて軍靴、
ふみちらしたる白雪も
花のいろにぞいでにける。

二十五

あはれ人皆五十歳の
ながき命のたゝかひに
ありとしらずや、花に風、
月に村雲、雪に泥、

二十六

ふみつふまれつ鳥獸、
鷲のあら爪、獅子の牙、
たけり合つゝ仇し世に
敵なきものやなかるらん。

二十七

されば國家の敵をうち、
君にさゝげていさぎよく
身を散らすこそ敷島の
大和心の花ならめ。

筆力

一

みがけや劍、とれや筆、
武勇は太刀にこもれども、
智德は筆にぞあらはるゝ。
海陸軍の武將も
筆とりふるふ世なりけり。
敵の彈丸より劍より
つよきは筆の力なり。

二

號外、號外、また號外、

「我軍勝てり」と門ごとに
さけぶや新聞配達夫、
旅順口の大激戰、
「我軍勝ちぬ」と家ごとに
大本營の公報を
つたふも筆の力なり。

三

大元帥の聖勅
きゝていさまぬ兵はなし。
大御心も廣島の
海より深き水ぐきの

さやうちはらひ生命毛を
血しほにそむる將校
たけきは筆の力なり。

四

こゝろつくしの沖みれば、
運送船は港より、
港につゞく兵站部、
たゝかひはてし野邊みれば、
かしこの林、こゝの森、
天幕張れる衞生隊
おくるは筆の力なり。

五

我艦隊の大砲の
時限彈に雲叫び、
着發彈に浪跳る、
砲烟は掩ふ大海の
潮蹴立てゝ淸艦を
微塵にくだく水雷艇
あらきは筆の力なり。

六

我陸兵の野戰砲
たえず火を吹き雲を吐き

天地もくらく鳴神の
とゞろきわたる弾丸の雨、
空より落つる黄龍旗
清兵斬つて騎兵隊
うばふは筆の力なり。

七

渤海いまだ氷らねど、
清艦うごかずなりにけり。
天津橋の霜ふみて、
日軍やがてわたりゆく
北京城も遠からぬ

旅順口の勝軍
うたふは筆の力なり。

八

旅順半島いつまでも
我政廳をおく露の
仁惠ふかき君が代の
ラッパの聲におどろきて、
ねふりさめにし民草を
てらす朝日の旗風に
なびくは筆の力なり。

君が代

上

君が代の
　ながきをいはんや、
　　ふかきをいはんや。
大海よ、大海原よ、
磯みれば松ふりにけり。
岩みれば苔むしにけり。
大君は
松にしませば、民は苔。

ともに千歳のふか緑、
巌もいまださゞれ石の
神代はる〴〵み渡せば、
海より深し君がめぐみは。

下

君が代の
　とほきをいはんや、
　　ひろきをいはんや。
大海よ、大海原よ、
浪みれば雲にかゝりぬ。
水みれば空につゞきぬ。

大君は
雲にしませば、民は涙。
ともにへだてぬ空と水、
さゞれ石より巖まで
萬世かけてながむれば、
海より廣し君がめぐみは。

天長節

一

國の爲とて賤の男が
鍬とる腕のいそがしき
世の生業をつとめつゝ、
猶そのひまに植置し
庭の白菊けふみれば、
千代の花こそさかりなれ。

二

人の爲とて賤の女が

糸ひく袖のいとまなき
世の手仕事もおこたらず、
猶そのひまに織果し
新桑絹は紅葉の
錦とこそはみえにけれ。

三

男は菊の花折りて、
女の髮にかざしつゝ、
女は秋のから錦
男にきせてもろともに、
天長節の祝ひ歌
うたふけさこそうれしけれ。

秋田家

あかねさす
夕日の影の殘りなく、
野田も、山田も刈あげて、
歸るをみれば烟管より
烟管にうつす烟草の火、
わかき心の友なれや、
二人かたらふ家路かな。
我山里の秋祭、
朝日影さす庭みれば

菊にも紅き花さきて、
紅葉も今ぞさかりなる。
赤みの杉の板の間に
あかき花毬赤ゲット
しきてならぶる朱塗膳。
椀にもりたるあかの飯、
赤味噌汁に芋いれて、
鮭の鹽引味もよし、
初穂の小酒くみそめん、
下戸にはあはれ山柿や
栗をばやらん妹も

明日の祭につれて來よ」。
「携て行かなん妹も、
いまや新わたつみはて〻
なすこともなし明日はまた、
今年の蕎麥粉、眞白なる
大根や葱の白根まで
もたせてやらんいざやきけ、
やらんといへば妹を
誰にかやらん妹の
こゝろは雪のやうなれど
顔はもとより白からず、

手足もおかしされば今
赤顔好の汝ならで
誰にかやらん妹の
否といふとも少女らが
否は然ぞ、妹の
こゝろの底は我ぞしる。
やがてやるべし白梅の
花さき匂ふ春をまて」。
「やよその事はおそくとも、
明日は我家にとく來れ」。

「我とくゆかん山里の
秋の祭ぞおもしろき」。

しら雲の
夕ゐる山の松の上に
いでにし月の影ふめば、
河ぞひ小田に初霜の
おくかとみえて風寒し。
鋤鍬荷ふ賤の男が
二人たどれる家路かな。

新婚旅

新郎

「山か、川か、
いづこへゆかん我妹よ、
今日はいもせの旅なれば」。

新婦

「山もよし、
川もまたよし、アヽ我背、
いかに行へはさだむべき」。

新郎

「我妹よ、
山やよからん花野ゆく
二人が裾に朝露の
かゝるうれしき旅やある。
いもせの山のすその原
草の枕のしばらくは
天つ國なり世の中も」。

新婦

「否我背、
川こそ山にまさるらめ。
棹さす袖に夕月の
かゝるうれしき旅やある。
いもせの川の小柴舟
波のまくらのしばらくは
神の國なり人の世も」。

新郎

「行けとなら
行もすべきが、いもせ川
秋霧ふかし水さむし」。

新婦

「行けとなら
行もすべきが、いもせ山
秋風あらし、路けはし」、
やよやきけ、
山としいへば川といひ、
川としいへば山といふ、
往方さだむる妹脊の
初あらそひぞおもしろき。
二人が袖も一方に

いつかなびきて花薄
むすぶとすれどたちまちに、
あらそひとけてもろともに、
山にも、川にもいでゆきぬ

天然

一

花の梢にふく風の
ひとりふくとはみゆれども、
みえざる御手にようずして、
ふく嵐こそなかりけれ。

二

青葉の陰にわく水の
ひとりわくとはみゆれども、
みえざる御手によらずして、
わく清水こそなかりけれ。

三

紅葉の上にふる雨の
ひとりふるとはみゆれども、
みえざる御手によらずして、
ふる時雨こそなかりけれ。

四

枯木の枝につむ雪の

ひとりつむとはみゆれども、
みゐざる御手によらずして、
つむ深雪こそなかりけれ。

松と藤

一

「新茶一杯まゐらせん、
草餅一つめせ」といふ
老婆が軒端もなつかしき
若葉の陰となりにけり。

二

三保の浦邊にあらねども、
松にかゝれる藤浪は、
天津乙女の羽衣の

かゝるが如くかゝりけり。

三

春日の宮にあらねども、
杉の森陰垣みえて、
茶摘む少女は神樂歌
うたふが如くうたひけり。

四

我は松なり、汝は何ぞ。
春の花とも夏の
花ともさらにさだまらず、
二心なる花なるか、

五

松にいひけり藤波は
「あはれうたがふ心より
鬼もいできて薪たく
竈ぞやがて地獄なる

六

烟となればもろともに
千歳契りしかひもなし、
なびけど散らぬ我こゝろ
しらでいかるや松の風」。

七

猶吹風のあらければ、
散らじと藤はからみつき、
梢はなれぬあはれさに
松も音せずなりにけり。

八

新茶一杯餅一つ、
おもへばこれも戀の歌、
こゝもうき世か藤の店
うき世の外のうき世かな。

菊

一

古き儒佛の經典も
しぐれの雨のさだめなく、
今の博士が倫理書も
たゞ木枯の音ばかり。

二

何をか友におくるべき、
聖書の外に書はなし。
春の二葉の根分より
人手たのまぬ菊の鉢。

三

夏の虫さへ我とりて、
朝夕水をそゝぎつゝ、
秋のさかりを待わびて
蕾いくたびかぞへけん。

四

冬までのこる花なれば、
霜よけをさへつくりしが、
贈る聖書に何添へん
菊より外に花もなし。

五

手づからつくる菊の花、
いまさら手折がたければ、
鉢もろともにおくらなん、
アヽ鉢ながらおくらなん。

聖誕祭

一

たま〳〵くればベツレヘム
故里なれどやどるべき
家だにあらずマリヤをば
のせきし驢馬の鞍ときて。
ヨセフが旅の宿とせし
賤が廐のわびしさは
いかにありけん白雲の
夕ゐる峰はかはらねど
入相つげし山寺の

つり鐘堂は跡もなく〳〵
産土神の宮あれて
時の鼓の音もせず。
小山田かへす牛馬も
小屋にかへりて休みけり。
日もくれ竹にねぐらとる
鳥もさわがずなりにけり。
天つみそらに星ひとつ
きらめき初てひんがしの
國よりきつる博士らの
むかしをしのぶ夕かな。

二

野川にかゝりて米かしぎ
大根をあらふ賤の女も、
山林に入りて落葉かき
枯枝ひろふ賤の男も、
同じ道ふむ友なれば
互にさそひさそはれて、
聖誕祝ふ教會の
夜の集にいでゆきぬ。

三

寒菊早梅折ませて

會堂かざる山松の
枝よりさげし蠟燭の
光まばゆくみえにけり。
安息日の聖學校、
通ひつゞけし男兒には
喇叭、軍刀、少女には
花の簪、草双紙、
老人も青年もおしなべて
あたふることのうくるより
よしや冬の夜ながくとも
うたひあかさん神の歌。

やがてこゆとて都人
さわぐや今宵年波の
よるをわすれて兄弟の
笑ふも神のめぐみかな。

四

聖誕祭に我ひとり
おくれて行くはをしけれど、
今年早くも我宿の
庭にいろづく初蜜柑、
わかちやらんと半なる
月もさし入る柴の戸を

しづかにあけて立聞けば、
あなあはれにも盲なる
友たゞひとり琵琶とつて
かたりゐにけり、さる程に、
ユダの荒野の小夜中に
天つ使等あらはれて、
羊牧者にぞいひにける
やよやおそれぞ福の
音信つげん昔時より
人みなまちし基督は
うまれたまひぬ此夕、

ダビデの邑にとくゆきて
槽にすむ嬰兒をみよ。
その後天軍あらはれて
天には榮光神にあれ、
地には恩澤人にあれ。
霜夜にさゆる四の緒の
古き調に新しき
歌を合せてひくきけば
あはれ今さら教會に
ゆくもゆかぬもかはりなく、
世はみな神の世なるかな。

洪水

一

水よ／＼と叫ぶ間に
渦まくそこにひきこまれ、
たすけをよびし人々の
聲猶耳にのこりけり。

二

子はその親のなきがらを
になひゆけども家はなく、
夫は妻のしかばねを
そのまゝおきぬ草の上。

三

なかば落たる橋材に
かゝりし馬のはらわたを
くはへてゆくか「枯枝に
烏とまりけり秋の暮」。

四

雨降夜半の野分風
寝耳に水の音たかし、
はねおきみれば床の板
はやふはつきて流れけり。

五

屋根にのぼれば屋根にまで
浪うちあぐる泥の海、
次の間にねし妹を
救ふひまさへあらざりき。

六

我手に花の袖ばかり
のこして散りし水底の
屍たづねて「わが宿を
めぐりてみけり秋の暮」。

七

根ながらぬけてみだれふす

井戸の柳の髪みても、
芥にくもる水鏡
うつれる月の櫛みても、

八

思ひぞいづる妹の
住にし閨のきり／＼す
なく赤壁に洪水の
あと猶高くのこりけり。

九

親なき後はこの兄を
親とたのみし人にさへ

死にかくれたる「秋の暮
男はなかぬものなればこそ」。

戀

附

實となるよりも山櫻
花にてちるぞあはれなる。

花の梢に繩かけて
首くゝりしをさめやすき
色に狂ひし男よと
人はいへども生命にも
思ふこゝろのかへがたき
戀やまことの戀ならん。

さそふ嵐のふかなくも
花おのづから散にけり

後

かくるゝよりも有明の
月のしらむぞあはれなる

月もしづめる青淵に
身をばなげしを水底の
影に迷ひし少女よと
人はいへどもつれなくも
思はぬ人を思ふなる

戀やまことの戀ならん。
かゝれる雲もみえなくに
月おのづからしらみけり。

愛犬

一

我犬の
たるゝ耳にも、まく尾にも、
櫻ちらして梢ふく
風のこゝろもしら雪の
ふりしく庭とよろこびて
あはれケレブがあそびしも、
昔となりぬ花の門。
　ケレブよ、ケレブよ、
散る花は

また咲く春もあるものを
汝はかへらず成にけるかな、

二

我犬の
たるゝ耳にも、まく尾にも
露おく夜半に獨立つ
われを主人としら菊の
咲ける垣外の野邊をみて
あはれケレブがとがめしも、
昔となりぬ月の門。

ケレブよ、ケレブよ、
入る月は
また見ん秋もあるものを
汝はかへらず成にけるかな。

三

我神よ、
人やけものにおとるらん、
つとめにたゆむ世をみれば
犬こそ人にまさりけれ。
夜も日もいさみいそしみて
あはれケレブがまもりしも、

昔となりぬ家の門。

ケレブよ、ケレブよ、

汝なくて

花のさく日も、月の夜も

門邊さびしく成にけるかな。

山墓

一

今は此世になき子とて

まよふ暗路はたどらねど、

谷蔭くらき杉林、

岩間の水の音さむし。

二

柴かる賤男、落葉かく

處女が袖もまだみえず、

我たゞひとり峰の墓

のぼればのぼる朝日かな。

またあたらしきおくつきの
小杉のかこみ、松の門、
白川眞砂しく路に、
のこるはうきのあと淸し。

四

手向の水も、さす花も、
ともにかれたる竹の筒、
しるしの石に失せし子の
その名をみるもはかなしや。

五

子を得て、父となれる身の

子を失ひて天つ父、
したふもふかし、袖の露
おつればおつる木の葉かな。

六

母にわかれし時だにも、
かくは泣ゝといひながら、
泣にし妻の花衣
たもとやいまもしぐるらん。

七

落葉かきわけ去年のけふ、
柩おさめしあとみれば、

土たかまりてみどり子の
ねたる姿に似たるかな。

八

冬がれにける草の床、
苔むす岩の枕べに、
殘れる菊はねふる子の
つみてあそびし花なるか。

九

小笹が垣はふく霜の
さゆるもしらぬ閨の戶か、
散りかさなれる紅葉は

かけし錦の小衾か。
母にかはりてみどり子の
ねふりまもりて子守歌
うたふは誰ぞ、山松の
梢にきなく小鳥かや。

十

うとふ小鳥よやよやまて
我もうたはんやまと歌、
冬の日影ものどかなる
松にとまりてきけよかし。

十一

「東山むかへばみゆる
みどり子の面影はらへ
峰の松風」。

十二

「東山落葉かきわけ
みどり子をうづめし塚に
ふる時雨かな」。

十三

「東山木の葉のちるも
淋しきに手向の菊は
かれてけるかな」。

古英雄

一 緒言

和歌の浦の千歳の松も
しら浪のしらぬむかしを
誰にかも我はとはなん、
濱千鳥あと消やすき
砂の上に宮居つくりて、
いのるともかひなかりけり
玉津島姫。

天地に滿る美の神、
詩歌の神、聖靈の鳩の
み翼にダンテ、ミルトン
のせしごと我をものせて、
ゆきませとねがへばやがて
目の前にあらはれにけり
猶太の國原。

岩はしるヨルダニ川の
川風に岸の柳の
うごくとておどろく魚の
たちまちにしづむも深し

千尋の青淵。

高櫓木の間にみゆる
椰子の色、エリコの城の
大庭に飼馴されし
小男鹿のなく音も長し
七里の白壁。

ギルガルの岡よりいで、
葡萄園宵〳〵あらす
小狐のふしどやいづこ、

さく百合花のたてるも高し
十二の石塚。

二　荒野

エリコの城はみえねども、
ヨルダニ川の瀬の音は
ちかく聞ゆる古塚の
椰子の木陰に休らふは
母にやはあらん、その子かも、
十二の石をゆびさして、
「誰の紀念ぞ、こは何ぞ、
其故あらばしらまほし

をしへたまへ」と問ひし子の
顔みてゑみつ、たらちねの
母のうれしさ、岩がねの
草に腰かけ、ヘブライの
母のつねとていにしへの
神の恩の物語
静にかたりきかせけり。

母

「天地創造る神の友、
信仰の父、アブラハム、
イザク、ヤコブの昔より

イスラエル人住馴し
牧場もあとにエヂプトの
くらき國をばいでしとき、
ヨセフをしらぬ國王の
追ひやきにけん後には
軍車の音ひゞき、
前には荒き紅海の
浪はさけびていまさらに
かへるもゆくも途たえて
民みなおそれをのゝきぬ」。

子

「母よその時いかにして、
神は民をば救ひしぞ」

母

「神は夜嵐ふきおこし
浪をふたつにたちわりて、
かわける路をあら海の
底にあらはし我民を
向の岸に渡せしが、
あとにつゞける夷等の
軍車も、燒太刀も、
鉛の如く大波の

底にうちこみたまひけり」。

子

「母よその時我民の
いかにうれしく思ひしぞ」

母

「あはれ我子よ汝もしる
モウセの歌をうたひあげて
處女が舞へば磯浪も
うつや皷の音たかし。
いまや荒野に朝露の
とくきいでゝ鴉かり。

マナをあつむる民草も
なびく山風、雷光、
空とゞろかし鳴神の
エホバの峰をあはとみて
かしこみたちぬ、雲間より
さすや日影ののどけくも
花野にあそぶ蜂の蜜、
牛の乳さへ岡のべに
ながるゝ國は我國と
契約重くいや高き
雲の御柱ゆけばゆき、

かへればかへる大御箱、
神のまに〳〵司人
貝ふきならし、武士に
弓とりもたし二つらに
わかれつらなりねりゆけば、
妻は子を負ひ老人は
杖つきたてゝおくれじと
いそぎすゝみて敵の邑
ふみあらしつゝ山といふ
山をば越て、河といふ
河をば渡り四十歳の

ながき旅路もはてにけり」。

三石塚

「荒野の旅ははてにしが、
あしき民草生じけり、
あはれモウセは契約の
地をもふまではかなくも
此世にあらずなりにけり」。

子

「母よモウセはヨルダンの
河もわたらで永眠しか」。

母

「終にモウセはなつかしき
カナンの國の山のすゑ、
水の行衛はみたれども、
モアブの野にて身まかりぬ。
いまやエリコの都より
二人の使者かへり來て、
敵の本城もその路も
しられにけりな、唐錦
旌旗ひるがへし雲なして、
槍と槍とは朝日さす
林のごとく、くろがねの

楯と楯とは岩垣の
かたくつらねて、武士の
ますら武勇は大將
ヨシュヤのあとに從ひて、
ヨルダン河の河岸に
たちならびたる折しもあれ、
百雷の落るごと
とゞろきし瀬の音もたえ、
千尋の淵の底みえて
ひだりみぎりにしらなみの
立わかれつゝ一筋の

途そいできぬ、司人
荷ふ黄金の大御箱
てらす御前を通らんも
かしこけれどもいまはとて
十二の族つぎ／＼に
河をわたりぬ、大將
ヨシユヤの御命いと重き
石をゑらびて紀念塚
きづきおきなば後の世の
人のこゝろもヨルダニの
河流れをせきし我神の

今日の恩を百世にも
千々の年にもかくながら
いやとこしへにいひつぎて、
傳へんためぞ族より
とく一人づゝいだしねと
いへばそのとき我族
ベニヤミンにてゑらみしは、
いとゞ奇しくおもふらめど、
今は世になき父なりき。
されば十二の人たちは
淨き石をば青淵の

ふかき底より荷ひあげ
一つの塚をひんがしの
水畔にたてつ、またさらに
十二の石をゑらみとり、
今も我子よ古柳
なびくあたりをよくもみよ、
根白高がや生茂る
西の岸よりさゝげ來て、
この石塚となせしなり。
いざやきけかし昔こそ
うたてかりけれ殿の男が

渡る野川の石橋と
なされしみれば日の神は
男神なりけん、處女子が
つとふ岩井の蓋石と
なされしみれば月の神
女神なりけん、森の蔭、
野路の芝生、石像の
たゝざる里はなかりしと
いかに我子よ、我神の
いかりたまふも宜ならずや。
さればヨシユヤはいさみたち

エリコの都、アイの城、
白浪さわぐガリラヤの
海邊の舟も洞にすむ
北山陰の敵までも
燒打なしつ、こゝよりは
雲井にみゆるヘルモンの
遠山の端の雪のごと
國消らかに治まりぬ。
ユダの族のあけがたに
ひとりきらめく星なれや、
横雲消ていづる日の

光のうちにかくれたる
ヨシュヤの遺す法典のごと
たゞ一卷につらねおかば、
十二のさつ矢折るものは
なかりしものを思ひきや
ヤコブの族おのがしゝ
住家もとむと峰に入り、
谷にかくれて、たちまちに
わかれ〳〵にならんとは。
春のなが雨の時すぎて、
夏もなかばとなりぬれば、

千草の花もかれはてゝ、
青葉もしぼむ水無月の
照る日くるしきアラビヤの
荒野の風のおとのみ
きゝにしものを、人馬の
あゆみのひゞきいや近く、
ヨルダニ川のあなたより
淺瀬わたりて襲ひくる、
モアブの國の野牛てふ
エグロン王をふせぐとて、
我族よりむらぎもの

こゝろふりおこしいと澤に
丈夫いでぬ、思ひみよ
秋の山路の菊の霜、
冬の岡邊の松の雪、
みだれ世にこそ忠臣の
名をもしらるれ。そがなかに
汝が父殊にたけかりけん、
太刀風あらくあら浪の
よせ來るごとにうち碎き、
追かへしつゝ岩岸の
かたくもたちてあまたゝび

戰ひたまへど、高櫓
たをるゝときに一本の
柱のいかにさゝゆべき。
あたり見廻し今はとて、
両刀の劍とりいでゝ
僕をまねきいひけらく、
「こは短かくも我家に
ながく傳ふる形見とせん、
またもや敵のよせきなば
われはや死なむ、やよやとく、
こゝをのがれてかならずも

妻子にこれを渡せかし。
さらば」ときゝてかなしくも
袖の露のみおちこちに
うたれし軀よこたはり、
血汐ながれて鎗もをれ、
楯もうもるゝ沙の上に
僕はふしてかしらさへ
しばしえあげず居たりけり。
かくてはてしと歩みより
言葉せわしく更にまた
父はいへらく「やよ僕、

ときおくれなばかひぞなき、
ましてや汝は奴隷なり、
ながらへばとて恥もなし。
また神の爲、國の爲、
盡さんときのなきことかは。
とくたゝずや主と共に
死ぬるばかりを忠とはいはゞ
かへりゆきね」と御言葉も
その理もいやたかき
かさね／＼の仰せをば、
いなみ得ずして實劍を

腰にとりはぎ、うしろをば
みかへり／＼ゆく僕、
山路にみえずなりにけり」。

子

「父はその後いかにせし、
猶もたゝかひたまひしか」。
問はれて母は胸せまり、
何といはねにさく百合の
花の露とはいひ消せど、
いつしか袖ぞぬれにける。

母

「なき父君は今はしも
こゝろ安しとあげどきの
聲すさまじくヨルダニの
谷にひゞきて兵馬の
足並とゝのへつぎ〳〵に
軍車をふしいだし、
植つきならべ射矢なす
早瀨わたりてモアブ軍
せめくるなかにきり入りて
みえずなりしが砂烟

立いでたまひし御姿の
すでくもあるかな右左
二人の敵兵をわきばさみ、
あはやけわしき岸邊より
とぶよとみれば音たてゝ
みどりの淵にしづみきと、
敵も味方も言傳ふ。
されば我子よ椰子の邑、
エリコの城のモアブ王
エグロンこそはかなしくも
父と國との仇なれ。

また此塚はありし世の
神の恩の紀念なり。
ゆめわすれな」といひをはり、
岩根をたちてなき父の
墓に手向の花なれや、
百合をば手折母と子が
手に手をとりてギルガルの
岡べにしげる無花果の
青葉がくれをかへりゆく。
こはベニヤミンの族なる
ゲラの獨子エホデにて、

まだ九歳のころなりき。

山里

萬の黄金千々の珠、
國の貢をさゝげゆく
御使なればはなはざりの
旅路ならずと僕みな
一間につどひ三日月の
かくるゝしらで山の端の
をぐらくなるはもしやまた
雨もよひかと窓をあけて、
みれば空には雲もなく、

星かゞやきてゐたりけり。
明日の旅路やわつかからむ
夏の日影にてらされて
面やかすなよ、道のべの
清水みつけて手にむすび、
のみつゝゆかん今宵より
その手を拭ふ手拭は
枕べちかくよせおけと
さけびあひつゝ大かたに
旅のそなへや果にけん、
庖厨のかたは寝しづまり

鼾の聲ぞたかゝりける。
時にエホデはなき父の
紀念の劔かくしもち、
ひとり忍びて屋の上に
のぼる階よりみおろせば、
燈の影きら／＼と
窓よりさして中庭の
木の葉のいろのあをやかに
なびく麻蚊帳すきとほる
卯の花いろの白がさね、
玉の帶さへまだとかず、

夜床のもとにたゞひとり
ひざおりふせていませるは、
埖にぞありける「アヽ神よ
我イスラエル罪あらば
その罪ゆるし今も猶
エグロンつよき手のあらば
その手をくだき、國民を
救ひたまへ」と祈るらし。
いのりのすえにかならずも
我身のことをくはふらむ、
かたゞけなさにせきあへず

落るなみだは露なれや、
袖ぬらしつゝ屋の上に
のぼりてたてばむば玉の
夜やふけぬらむ苔むせる
垣ねの路に立犬の
遠聲いどゞものすごく、
蔦はふ壁をはなれいで
蝙蝠ちかく飛かよふ。
高屋が上を立あるき、
エホデひそかに思へらく、
すぎにし事はかねてより